

四、彗星綺談

(イ) 拙著『煙洲先生と横浜』出版記念と老生の米寿祝賀式

私は、昨年（昭和五十九年）四月四日で満八十八歳になりました。所謂米寿であります。恩師煙洲鈴木達治先生がお亡くなりになって、昨年が丁度二十三回忌に当りますので、煙洲会代表、菅要助氏を初め、幹事村松四郎君等の御厚意により、拙著『煙洲先生と横浜』を出版して、先生の御遺徳を偲ぶことが出来、まことに幸福でした。

それで、その出版記念と、不肖私の米寿の祝賀式とを四月二十五日にお催し頂きましたことは、老生にとり二重の喜びでした。

この祝賀式の当日、午前七時四十分から、TBSのラジオ放送で、日本ハレー協会の近況報告がありましたとき、その短い放送の中で明治四十三年（西暦一九一〇年）私が神中（横浜第一中学）の二年生のとき、ハレー彗星を見た体験談が電波に

のりましたので、記念のため録音しましたが、これは、その数日前にTBSの局員との対談を抄録したものでした。

何故に自分の如き星に関して、ぶの素人に対談を求めたのかが疑問でした。

当年八十八歳の老人というのが、ミソで、日本ハレー協会の宣伝用のダシに使われましたことは、流石にTBSの情報機関としての敏捷さを物語るものと感心しました。

ところで、米寿祝賀式は、前記放送のあった当日、午後四時から川崎駅ビル五階の宴会場で開かれ、多恵子、総子、美那子の娘三人もお招きをうけて出席しました。そして御鄭重な御祝辞や記念品まで預戴して、真に光栄でした。そこで次のような謝辞と感想とを述べました。

「本日は、この度の拙著『煙洲先生と横浜』の出版記念と、不肖私の米寿祝賀とを兼ねてお催し下さいました記念すべき会で、私にとりましては喜びの二重奏で、終生忘れることの出来ない会であります。こうしたお催しを特に企画して下さいました本会代表の菅さん、幹事の村松さん並びに御協力下さいました昭七会の小松さ

ん初め、会員の皆様方の御芳情に對して、茲に心から御礼申し上げます。

この度の本は、その装幀が、自由主義教育の發祥地弘明寺の校舎を背景とした田辺画伯の素晴らしい名教自然碑の画と橋右京先生の寄席文字とで、手前の乏しい内容を補って余りあるものとなりました。更に、白橋印刷の御協力を得ましたことと共に、是等の方々の温い御後援を頂けたということは、全く恩師煙洲先生の御洪恩のお蔭であります。

扱て、私の米寿ですが、私は明治二十九年四月四日生れで、西曆一八九六年ですので、十九世紀の生き残りということになります。

去る四月二十二日の日旺日は、イースターEaster といふので、イエス・クリストの復活祭でした。

元来、西欧では、四月といふのは良い月とされ、この月に生れた者は幸福だと申します。また仏教国では四月八日は御存知、釈尊の誕生日で、灌仏会、花祭が催されます。兎に角、洋の東西を問わず、四月には花が咲き、良き陽気になります。

本年などは、特に雪が多く、四月に入っても、端歌はづかの文句のように、「梅は咲い

たが、桜はまだかいな」と桜の開花が待たれました。

弘明寺観音とか、学校裏山の若宮八幡境内にある桜が開花すると、地元の中はうきうき致します。普段は余り気がつきませんが、この東西の丘にある桜が色づきますと、それがなにやら婦人の頬に薄く紅をさしたように綺麗になる。ああ!! あそこに桜があるんだな」と今更ながら驚きます。

源頼政が若い頃詠んだという例の歌、

「みやまぎの その梢とも見えざりし 桜は花にあらわれにけり」を思い出します。

これは、実に風流というのですが、これにひきかえ、お花見で、酒に悪酔いした連中が「からおけ」をわめいたり、足もとも怪しく乱舞するに至っては、無粋も甚しいものです。こうなると、全く四月馬鹿、エイプリルフール April Foolとなりますから、四月生の者は特に自粛しなければなりません。

とまれ、私は今まで馬齢を重ねて参りましたが、これも天寿と申しますか、上よりのお恵み、師恩の賜であります。

馬齡と申しましたが、馬の年齢はその齒の年輪で計ります。馬という動物は余り長命ではありません。御承知の競走馬のサラブレッドは、三才馬から五才馬という若駒が働き盛りで、私共人間が成人式を迎える二十歳にもなると、廢馬となり、昔の軍隊でも、民間に払い下げたものです。

明年は、私も数え年では九十歳となり、再来年は九十一歳で、懸案のハレー彗星をもう一度この眼で見る好機に恵まれます。これも亦、上よりのお恵み、師恩のお蔭だと存じます。

本日は、皆様方の御援助により拙著の出版記念と老生の米寿とをお祝い下さる盛大な会をお催し頂きましたことを茲に重ねて御礼申し上げます。唯今、私は、この喜び二重奏で胸が一杯です。真に有難う御座いました。

この席でも私はハレー彗星をもう一度という自分の念願を公表しました。

(四) 日本ハレー協会会員となった経緯

フォーマルな儀式が終つて、晚餐に移り、一同談笑裡に楽しい食事を致しました。

その時前述の謎が解けました。それは昭七会の石川久能君が黙って一通の封筒を私に手渡して呉れたので分かったのですが、彼が御親切にも入会金を支払って、私を日本ハレー協会の会員として推薦して下さいました。

自分は何という果報者であろう!! これも亦教師冥利というのでしょうか。

(ハ) 恩師関根源三郎先生

果報者と云えば、ここで、ちょっと今迄不勉強だった アイドル idle boy ボーイ にやる気をおこさせて下さった恩師関根源三郎先生のことを語る自由をお許し頂き度い。

明治四十一年、再び学制が改正され、高二から高一に逆戻り、横浜市立尋常高等吉田小学校の元の古巣に帰り、関根源三郎先生担任のクラスに編入された。先生は所謂「晴耕雨読」をモットーとされ、晴天には専ら生徒の体位の向上を計り、体操の時間には、クラスを四つのチームに編成して、横浜公園の桜の植え込みの間にある僅かな空地を利用して、私達に野球をさせて下さった。先生も、前年先生チームの主将で、捕手をつとめたほどのスポーツマンでしたから、その指導は全く堂に入

ったものでした。また、先生は上州の御出身で、柔道は三段という猛者でした。

雨天には、勿論、教室での授業ですが、先生は教師として万能選手で、英語は勿論、国語では古典に通じ、『太平記』で俊基卿の東下りなどを生徒に暗誦させました。自分が成人して結婚の相手に選んだ女性は幼少の頃から琴を山田流の名人越野栄松師に仕込まれましたが、子女の育成のためと、戦時中のブランクで約三十年を中断しましたが、結局、箏曲が彼女の生甲斐で、栄松師の歿後は、栄松師の高弟で斯界の重鎮、中田博之先生に師事、自分の養成したお弟子さんも相当数に上り、何度か温習会を主催するようになりました。そうした演奏会で、私が特に、関心を持ちましたのは、「雨夜の月」という曲で、『太平記』の明文、「落花の雪に踏み迷う、交野かたのの春の桜狩……」のくだりでした。

恩師関根先生は習字の指導においては拔群でした。それは、先生が当時書家として有名だった西川春洞先生の弟子として、横浜市内では一廉ひとかどの書家だったからでした。年末には生徒のために正月の書き初めとしての習字を表装させて教室で展示したりしました。

「良く遊び、良く学ぶ」の醍醐味を教えて下さったのは関根先生でした。先生に教えを受ける以前は、クラスの席次も中で、県立横浜一中への進学など到底考えられなかったのですが、自分の好きな野球を存分にやらして頂き、第一軍の投手兼主将というチームの牽引車けんいんしやとなり、勉強の方も先生の御指導により、やる気十分という自分になりました。その結果、明治四十二年神中への入試においては、わが吉田小学校から五人入学出来た生徒中、三名は関根先生のクラスからで、幸い自分もその一人となったのです。有頂天の喜びを私が経験したのは、これが初めてでした。

(二) 一九一〇年四月ハレー彗星を見た

この嬉しい神中一年の夏休みに、母方の実家信州の栗沢家の養子となっていた弟竹雄が、当時在学していた小学校野球部の選手達に、是非コーチをしてくれと頼まれ、喜び勇んでバットを肩に天竜川畔を歩いたことは、拙著『寄席の息子と英文学』及び『煙洲先生と横浜』の思い出の記中、「神中時代」で詳述しました。その翌年、私が神中の二年生になって間もなく、目下話題のハレー彗星をこの眼で見たのです。

我家新富亭の三階から、東側の手摺りに身を乗り出して。

東の空に、この彗星の尾が水族館の水槽内を遊ぶ細っそりした小魚のように見えた。全く夢幻的というか、空のミラクルのようにこの眼に映りました。

明治四十三年、西暦一九一〇年と云えば、十九世紀のロシアの文豪レフ・トルストイの亡くなった年であり、またアメリカの諧謔小説家として有名なマーク・トウエインの死んだ年でもある。

この米蘇の二大文豪は、一八三五年と一九一〇年という地球上からハレー彗星を二度見ることの出来た年に生存しながらその機会を逸したことは残念でした。尤もマーク・トウエインの方は生れたばかりの赤児だったので当然だったと云えるが、トルストイの方は八歳だったので、可能であったかも知れぬが、不幸にも父の伯爵がお亡くなりになった年だったので恐らくその機会を逸したものと思われる。何れにしても、二人にとつては残念至極であった。特に一九一〇年の場合は、折角の好機を逸した訳である。真に不運だった。

その点で自分には、もう一度見られるかも知れぬという可能性、つまり、幸運が

残されている。

ところで、私共の一生はよく善い星の下に生れたとか、悪い星の下に生れたとか、自分の運勢を星のせいにする風習が昔からあった。私の場合、上よりのお恵みによりハレー彗星を生涯に二度見る機会を得るならば、米蘇の文豪が二度の機会に恵まれないながら二度とも見れなかった不運に比べれば、幸運の上なく、願わくば再来年まで天寿を全うしたのである。

ところで、明治四十三年、自分が神中の二年生だった時の運勢は如何だったかを回顧すると、極めて複雑な気持になります。

毎年六月の中旬に恒例の大運動会があり、その棹尾を飾る学年対抗の選手競走で、各学年から二名の選手が選ばれ、八〇〇米を走る。選手は夫々の学年を示すカラーの運動シャツの右肩から斜めに、一年は一本、二年は二本というその学年を示すカラーの襟たすきが記されている。僕等の学年は黄色で、黄色い二本のストライプが入っていた。

自分は一年のときは選手ではなかったので当然二年になっても選手になるなどと

は考えてもいなかった。ところが、二年になったとき、選手の一人が辞退したために、急にその代役を選考することになり、自分は平素野球をやっていたので八〇〇米位は走れるだろうと、試しにその選考レースに飛び入りで出たが、どうしたはずみか、二回行われた選考に自分が二回とも一着になり、遂に二年代表の選手となり、卒業まで選手を続けたのであるが成績は余り芳しくはなかった。

偕て一学期の学業成績は、そんなこんなで思わしくなかった。神中では当時、学期試験が済むと、その不良成績の者にはハガキで家庭へ通知する慣例になっていた。つまり、六十点未満の者には、「右の学科温習下され度し」という通知が父兄のところへ郵送されるのでした。五十点未満はともかく、四十五点未満となると問題で、その学年の進級はまあ困難というジ、ン、ク、ス、があった。しかも、自分の代数学四十点未満というのでしたから、正に青天の霹靂であった。正直のところ、自分は青くな

った。
昨年の夏休のように、野球のコーチどころではなく、信州にいる兄に代数のコーチを懇願しなければならぬ羽目になった。

幸い、兄は代数が得意で、因数分解はお手のものだったので、自分は、朝夕、母屋と土蔵の間の空地でキャッチボールをする程度で我慢し、因数分解に没頭した。そして、どうやら自信もついたので二学期に対処することが出来た。学校では、一学期の成績不良者を放課後に残して補習をして下さった。普段ですと、放課後野球をやるのですが、それが出来ないのが残念でした。この時の庄司先生の愛の答には、お恨みするどころか、先生の御温情を有難く思いました。

兄の援助と先生の御指導との御蔭で、二学期、三学期には代数の試験はノー・エラーで、学年末の成績も七〇点になっていました。その結果、非力ながら、頑張れば数学でも恐れることはないという確信を得た。とまれ、一九一〇年のハレー彗星は、私に「油断大敵」という大警告を与えてくれた。こう考えると、ハレー彗星を見たことは私にとって幸運であったと云えよう。

(四) エドマンド・ハレーの略伝

(一)でこの彗星の発見者エドマンド・ハレー (Edmund Halley) についてその略

伝を記してみよう。彼は一六五六年十月二十九日、ロンドンの石鹼製造人の子として生れ、セント・ポール校に入学、数学並びに古典に秀で、十七歳でオックスフォード大学に進み、二十歳のときセント・ヘレナへ航行して、南半球における恒星の位置を確認した。一六七七年彼は自分の地図を完成し、その翌年英国学士院の特別会員に選ばれた。一六七九年以降大陸の各地を旅行し、パリで、後に自分の名ハレーで呼ばれるようになるこの彗星を初めて観測し、この彗星の再帰を後に予言した。

一六八四年ニュートンと知己になり、自分自身でも研究していた引力問題について彼と語り、一七〇五年、彗星の運行に関する自己の研究結果を発表した。特にこのハレー彗星は約七十六年の周期でその軌道を運行することを説き、一六八二年に彼はその再帰をフラムステッド (Flamsteed)、ヘヴェリウス (Hevelius) と共に説いた。

ハレーはフラムステッドの没後、グリニッチ天文台長となり、月の運行等、幾多の研究業績を残して、一七四二年一月十四日に永眠した。彼は一七五七年の彗星の再帰を予言したが、自分ではそれを見ることは出来なかった。

因に一九一〇年におけるハレー彗星の再帰については、グリニッチ天文台のコウウエル及びクロメリンの計算が正確であった。

一九一〇年四月十七日に、近日点を通過するらしいとの計算だったが、現実には四月十九日であった。

自分がハレー彗星を見たのは神中の二年生になったばかりという臆気な記憶であったが、この記録は、ハームズワースのユニヴァーサル・エンサイクロペディアにより明白になった。前記四月十九日というのはロンドン時間だから、横浜では四月二十日ということになる。

参考までに一九八六年以前にハレー彗星が現われた年をここに記すと――

西暦前二四〇年、八七年、一年

西暦六六年、一四一年、九八九年

西暦一〇六六年、一一四五年、一二二三年

西暦一三〇一年、一三七三年、一四五六年

西暦一五三一年、一六〇七年、一六八二年

西曆一七五九年、一八三五年、一九一〇年

ㄨ ノルマン征服（コンクエスト）

前述したクロメリンの算定による一〇六六年は英国史上特筆すべき年である。

この年から私の彗星綺談を続けよう。

一〇六六年と云えば、サクスン王ハロルドが、ノルマン王ウイリアムによってイギリス本土を侵攻され、南部イングランドのドウヴァに近いヘースティングズにおける決戦に敗れ、無惨にも落命、サクスン王家がノルマン王家によって滅ぼされた。正に天下の一大異変を告げるハレー彗星出現の年であった。

さて、ここで両国王の関係を述べると――

ハロルドは、如何なる迫害にも屈せぬ信仰の持主だったエドワード・コンフェツサ一の葬儀の当日、王位に就いた。この急速な即位は、折からルーアン (Rouen) の狩猟園で狩猟中のノルマン王ウイリアムの耳に入った。そこでウイリアムは直に使者を差し向けて、ハロルドに即位を断念させようとしたが、ハロルドはこれに応

じなかつた。それで、フランスの貴族達は結束してイギリスへの侵攻に立ち上つた。ウイリアム公は彼等貴族達に英国内の財宝と土地とをたっぷり分与することを約した。また、ローマ教皇はノルマンディに神聖な御旗と聖ペテロの遺髪と称するものを贈つて彼等の士気を鼓舞した。

ハロルド王には、フランダースに弟がいたが、彼とは不和の間柄であつた。また悪いことにはその弟はノルウェイ王の臣下としてウイリアム公の援助を得て、英軍を破り、更にヨークを包囲した。

ハロルドはヘースティングズの海岸でノルマン軍の侵攻に備えんとしていたが、ヨーク包囲の報に、兵をダーウェン河畔のスタンフォードへ進め、対戦せんとした。この間にノルマン軍は大挙して英国海峡を渡り、ヘースティングズ付近に宿営し、その指揮官は昔ローマ軍の築いた城内に入った。そのため、英軍はそこを撤退したので、ノルマン軍は数哩四方を焼土と化さしめた。この敗報に接し、ハロルドは急遽ロンドンに戻り、一週間足らずでその軍備を整えた。彼はノルマン軍の状勢を偵察するために、密偵を送つたが、敵將ウイリアムは、彼等を捕えて、彼等に自軍の

陣地の全容を見せた上で彼等を釈放した。釈放されて戻って来た密偵達は、ハロルドに、「ノルマン兵は、イギリス兵のように口鬚を生やしてはおりませんでした」と報告したという。

ウイリアム公は、「来るなら来て見ろ」と平然としていた。彼はハロルドに和議を提案したが拒否されたので、愈々決戦を覚悟し、一〇六六年の十月半ば、当時セシラックと称する地域で英軍と対峙した。

ノルマン軍が弓矢の射手と、歩兵及び騎馬の三隊を以て、「神よ、助け給え」と叫べば、英軍は、「神の十字架、聖なる十字架」と呼応する。ノルマン軍は丘を下って英軍に攻めかかり、騎士同士の一騎打ちがその緒戦となった。英軍は射かけるノルマンの矢の雨を凌いで奮戦、ウイリアム公は退却と見せて、逸る英軍の追撃を引き寄せて、これを大量に殺傷した。剣撃の響が耳を聳するばかり、赫々と輝く夕日を浴びて、死屍累々大地を覆うた。

ハロルド王は重傷を負うて斃れ、英軍は、遂に敗れた。勝利の歓声を上げるウイリアム公の陣営の上には皓々たる月が冴え渡り、満天に星が輝いていた。

次にハレー彗星が地上から見えたのは西暦一一四五年であった。

(ト) ヘンリ二世とトマス・ア・ベケット

一一一七年頃、ロンドンの貿易業者ギルバート・ア・ベケットの子として生れたトマス(Thomas)は天賦の才能と美貌の持主で、マートン(Merton)大修道院を皮切りに、ロンドン、オックスフォード、パリで学を修め、特にパリでは民法を研究した。しかも、その語学は天才で、フランス語を、ノルマンの貴族や、役人に劣らぬ流暢さで語り、また、若い頃、ロンドンの州長官事務所の下級書記を勤めたりした。その間、キャンタベリの大司教スィオポールドの眼にとまり、その推薦でボローニアの有名な学校で民法を勉強する機会を得た。そして碩学グラティアンの教を受けてから、アルプスを越え、更にバーガンディのオーゼール(Auxerre)に暫らく滞在して、同地の有名な民法学者から学んだという。

ロンドンに戻ると、執事として宗門の仕事に携り、更に、ローマの教皇庁に派遣されて重要な交渉係として活躍した。そしてヘンリ二世が即位すると、大司教のス

イオールドは首相としての一切の権限を得たが、老齡と、健康が優れぬために、実務は総てトマス・ア・ベケットに委任していた。

こうした英国宗教界における画期的な時にハレー彗星の出現のあったことを思うと、何か異変の起ることを予想せざるを得ない。

ヘンリ二世は、その後、キャンタベリの大司教の後任としてトマス・ア・ベケットが就任した時、内心では、嘗て自分の腹心として、国家財政の建直しに敏腕を揮った実績を高く評価していたので、トマスなれば、英国内における僧侶に対する裁判権を国王に委譲し、また、ローマ教皇との交渉も有利に取り計らってくれるであろうと胸算用をしていたが、案に相違して、聖職者に対する裁判権を国王に委譲せぬばかりか、ローマ教皇に対しての交渉も思うにまかせぬので、つい、側近の四名の騎士にその不満を洩してしまった。

血気に逸る四名の騎士は早速、馬を飛ばしてキャンタベリの大聖堂に乱入し、今、丁度、夕べの祈りを捧げんと、僧侶の一人に権標の十字架を捧持させ、静々と祭壇に進むトマスを取り囲み、無慘にも大司教を斬り苛んだ。

トマスはこの殉教によって、聖者の列に加えられ、キャンタベリの名声は愈々天下に轟き、この大聖堂へ参詣する人々が益々殖えるに至った。

流石のヘンリ二世も自分の罪の恐しさを知り、その後、この大聖堂に参拝し、自分の膚を笞打たせて懺悔したと伝えられている。

このヘンリ二世は才智に長けた王様ではあったが、子供達には、皆背かれた不運な人であった。

アイルランドに遠征して、一一七一年のクリスマスをダブリンで過していたが、翌年の三月の末に、イングランドと、アキテーヌから船が到着したので、直にアイルランドを去る決心をした。とまれ、五カ月間、イングランドや大陸からの海上連絡のなかったことは注目すべきことだった。この連絡の杜絶したのは決して偶然ではなく、ベケットの暗殺により、彼自らが招いた精神的苦悩、つまり自責の念に駆られ、そのほとぼりの冷めるまで当分、船を寄越して呉れるなど命じていたらしい。だから、急遽ヘンリがノルマンディに姿を現した時には、フランス王もびっくり仰天して、「彼は馬にも乗らず、船にも乗らず、空を飛んで来た」と言ったという。

ヘンリは今は四十歳になっていた。恐らく髪には白いものが混っていたであろう。彼には四人の息子がいた。長男のヘンリ、次男のリチャード（通称獅子心王）、三男がジェフリー、末子のジョンは未だ六歳だった。

一一七二年には、上の三兄弟が父に叛いて反乱を起し、また王妃エリーナーがそれに加担した、長子のヘンリはフランス王の息女を娶って、戴冠式を挙げ、イングランドから、ノルマンディの割譲を父にせまり、弟のリチャードはアクイテーヌを要求し、第三子のジェフリーはブリタニーの即時所有を逼った。

これら反逆の三兄弟は父の許からフランス王の下に走り、王妃エリーナーもその後続いた。

ノルマンディの司教達の説得によって、王妃エリーナーと息子達の帰英を促し、ヘンリはそれから王妃を多年に亘って監禁したが、これは単に王室内の騒動ではなかった。

フランス王ルイはヘンリの領土拡張を恐れていた。それはヘンリが特に才智に長けていたからであった。

ノルマンディヤ、アキテーヌ、それに、ブリタニーの人民は皆独立を望んでいた。

若い反逆の王子達には、王権踏襲の争いは単なる個人的問題だった。リチャードのように「意見の相違は、自分達民族の生得権だ」と昔の年代記の記者が信じたように考えたのはプラントジェネット家の呪われた宿命であった。

ヘンリ二世の獲得した権力は余りにも大きく、これを長く維持することは困難であった。この権力は薄弱な王の手に入れば直に崩壊するであろう。また、実際に、ヘンリの死後、四半世紀足らずで崩壊した。

王子のヘンリは、フランスが同意してくれるまでは、父とは和議を結ばぬと誓っていた。この連盟に加わったのはスコットランド王のウイリアムと、フランダーズ伯のフィリップとであった。

イングランドでは、国王に圧迫されていた不満の貴族連、王に対する共同の敵がノルマンディに侵入したが撃退された。

若い王子のヘンリを連れ戻そうと、艦船が用意されていた。然しこれに不安を抱

く者が多かったが、独り父のヘンリは毅然としていた。七月八日、愈々国王は乗船して、激しい時化しげの中にイギリス海峡を渡った。長い困難な航海にも拘らず、平素にもまして厳然としていた。然し彼の心は何か深い物思いで一杯のようだった。

キャンタベリの聖ベネットの聖堂で無惨にも斃れたその男は今や、聖列に加えられ、その墓には奇蹟が生じ、貴賤を問わず、これに詣でる人々はあとを絶たない。

七月十日ヘンリ二世は、夜中、サウサンプトンから乗馬でキャンタベリに向った。灰色の黎明の中にキャンタベリ聖堂の塔が見えて来た。彼は馬を下りて、懺悔の衣をまとい、はだしで、聖堂へと歩いて行った。

彼はベケットの墓前に平伏して、この聖者の靈に敬虔な祈りを捧げ、ロンドンの司教はヘンリの罪が天帝によってお許し頂けるようにと説いた。

その時、この偉大な国王は、そこに集うた修道僧や聖堂の参事会員達の前で、悔恨の余り激越な叫び声を放った。そして彼は結び目に瘤のある綱で笞打された。そして真暗な教会の地下室でその夜を過した。また、その翌日は食事も摂らず、馬でロンドンに帰った。彼はロンドンに戻ると間もなく病気になった。顧みるとヘンリ

・プランタジエネットの生涯は数奇な一生であった。僅か二十一歳の時に英国王に即位したが、これは先王ステイヴンとウインチェスターにおける約束であった。ステイヴンの死後六週間目である。

彼と妃エリーナはウインチェスターで戴冠式を行った。彼等は堂々と乗馬で、奏楽裡に、市民から歓呼の声を浴び、その行進の路上には花が投げられる盛況だった。このようにヘンリ二世の御代は上首尾のスタートだった。国王と王妃の所領は莫大なもので、フランスにおける領地は、二人のものを合わせると、全フランスの三分の一を占めていた。

ヘンリ王は膂力、智力共に優れ、また決断力に富んでいた。それで、先代の悪弊は、これを直ちに除去し、また、多くの不穏な兵士達を英国から退去させた。王所屬の城を総て回収し、悪辣な貴族共の居城を取り壊さした。庶民を嘗て苦しめたこれら貴族の居城の数は相当多かった。

国王の弟ジェフリーはフランスにおいて反逆したが、間もなく国王と和解した。でもそれから程なく急逝した。

ジェフリーの死後、領土を拡張せんとしたヘンリ二世は、フランス王ルイと戦うことになった。フランス王とは、以前、円満な間柄だったのだが、この二人の確執は、幸に、ローマ教皇の取り成しで収まった。